

逆井孝仁先生の人と学問

老 川 慶 喜

1. はじめに

逆井孝仁先生は、1991年3月立教大学経済学部を規程により定年退職された。先生は、1958年9月に同志社大学経済学部から本学経済学部へ転任され、以来32年6か月の長きにわたって、本学において学生の教育にあたられるとともに、学部のゼミナールや大学院での研究指導、あるいはまた日本経済思想史研究会などでの学会活動を通じて、多くの研究者を育成してこられた。先生は、本学経済学部において日本経済史の講義を担当してこられたが、本来のご専門は日本の近世経済思想史である。もっとも、杉原四郎氏（関西大学・甲南大学名誉教授）が指摘しているように、先生は近世経済史および近世経済思想史の両分野で多くの貴重なお仕事をなされており（杉原四郎「逆井孝仁教授の業績について」、逆井孝仁教授還暦記念会編『日本近代化の思想と展開』、文献出版、1988年1月、所収。その後、杉原四郎『日本の経済思想家たち』、日本経済評論社、1990年6月に再録）、先生のご研究の特徴は経済史研究と思想史研究とが車の両輪のごとく一体となって、独自の近世経済思想史の体系を打ち立てられた点に求めることができるように思われる。先生が還暦をお迎えになられたとき、私たちは記念論文集として前掲『日本近代化の思想と展開』を出版させていただいた。それは、先生のご指導を受けた17名の学内外の研究者による日本の近世から近・現代にわたる経済思想史および経済史の諸論文から構成されており、ここにも先生の学問の特徴の一端が反映されることになったように思われる。

ところで、こうした先生のこれまでの学問の足跡は、①第1期——東京大学・同志社大学時代（1950年代）、②第2期——立教大学時代〔Ⅰ〕（1960年代）、③第3期——立教大学時代〔Ⅱ〕（1970～80年代）の3期に区分できるように思われる。私が本学の大学院経済学研究科修士課程に進学したのは1972年4月であるから、上期の時期区分に従えば第3期の時期に先生のご指導を仰いだことになり、先生の研究上のご経歴からすればたかだかその後半の20年間にすぎない。このような私が先生の学問をご紹介するには荷が重すぎ、またこの時期区分あるいは先生にはご不満かもしれないが、後学の私が先生のご研究を理解するには便宜と思われるので、以下この時期区分に従って先生の学問の足跡を、教育活動とも重ね合わせながら追ってみることにしたい。

2. 第1期——東京大学・同志社大学時代（1950年代）

逆井先生が東京大学経済学部にご入学されたのは1945年4月で、ご卒業は48年3月であった。大学を卒業すると同時に、先生は大学院に進学され、49年3月から53年12月まで経済学部助手を務められた。今年（1991年）の1月19日に行われた先生の最終講義での表現をお借りすると、先生は「ちょうど旧日本帝国主義、天皇制国家が敗戦によって解体して、戦後の『民主化』の時代を迎える」ことになった「歴史的な時期」に学問を始められたということになる。

東京大学助手時代に先生がご執筆されたのは、E・ハーバート・ノーマン著『忘れられた思想家——安藤昌益のこと——』の書評（東京大学『経済学論集』第19巻第5号、1950年1月）であった。極めて丹念な研究史の整理を踏まえて執筆されたこの書評は、分量的にも内容的にも一本の論文に十分値するものといえるが、その冒頭における「いかなる時代にあっても、歴史を押し進めるものは、支配者の恣意と権力ではなく、民衆の自由と幸福を望む高貴な魂の確信にみちた行動である」という記述は、若き日の先生の学問への情熱を彷彿とさせるものがあり、しかもそれはその後の先生のご研究を一貫して流れる基調となっているように思われる。その意味で、この書評は経済思想家としての先生の処女作にふさわしいものであった。

先生は1954年1月から同志社大学経済学部の教壇に立たれることになるが、その後も安藤昌益研究は続けられ、その成果は「安藤昌益の封建制批判とその背景(1), (2)」(同志社大学『経済学論叢』第6巻第3, 4号, 1955年7, 10月)となって結実する。この論文の冒頭で、先生は「日本人は自らの永く暗い封建時代の歴史のなかにあつて、勤労民衆への限りない愛情の故に封建支配のみならず、一切の階級支配・搾取そのものを断固として否定し、無階級の理想社会を求めると至った独創的な思想家をもっていることを世界に誇つてよいであらう」と述べておられる。この思想家こそ安藤昌益そのひとであるが、この短い言葉の中に当時の先生の安藤昌益研究に対する姿勢が端的に表現されている。自からの軍隊生活の中で、「暴力的な、そして非理性的な、抑圧的な」天皇制国家の本質をみてとつた先生は、そこからの「解放」の道筋を探り当てることを学問的な課題とされ、そうした思いが先生をして安藤昌益研究に駆り立てたのではないかと推察されるのである。

ところで、「安藤昌益の生きた時代と彼の徹底した社会批判の歴史的特質」を描き出すことを意図されたこの論文は、旧来の昌益研究の方法に鋭く反省をせまり、その水準を著しく引き上げたのであった。家永三郎氏の研究（家永三郎「安藤昌益の思想」、『史学雑誌』第60編第8号、1951年8月）のように、昌益の思想を積極的側面としての革命性（近代的要素）と、否定的側面としての空想性・復古主義（封建的要素）とに区分してみても昌益の思想の歴史的性格は明らかにならないと批判して、先生は昌益をとりまく封建農村の社会的状況とそこでの封建小農民の動向の中に昌益の思想を位置づけて、その空想性・復古主義を革命性そのものの限界

として把握されたのである。これは、単に旧来の昌益研究に対する批判というにとどまらず、経済思想史研究の基本的な方法を提示したという側面からも極めて注目される論文であったと思われる。こうして、先生は安藤昌益の研究を通じて、経済思想史研究に入っていったのである。

ところで、これはあまり知られていないことと思われるが、先生はこの時期、昌益研究と平行して、あるいはそれ以前から近世社会における人口政策という経済史の研究に着手されていた。東京大学大学院時代に先生は、「徳川封建社会崩壊過程の一考察——徳川時代に於ける人口対策と農民層分化についての一研究——」（1949年1月）を執筆されていた（おそらく、この論文が認められて、先生は東京大学経済学部助手に採用されたものと思われる）。そして、その後、その第3、4章に加筆して「近世幕領における人口政策の一考察——下総国結城郡恩名村の例について——（1）、（2）」（同志社大学『経済学論叢』第5巻第4、6号、1954年6、12月）としてまとめられた。同志社大学に移られてから、先生が最初に著わしたのは、実は先の安藤昌益の思想を扱った論文ではなく、徳川時代の人口政策を問題とされた経済史の論文であったのである。

先生は、この論文で徳川中期以降の農村を広く捉えるに至った、農民の都市への流出および墮胎・間引き（人為的人口制限）といった現象を、百姓一揆とならんで幕藩体制のもとでの「不可避的な近代的進化への胎動が産み落した激しい矛盾の一結果」として位置づけ、従来の研究の限界を次のように指摘する。すなわち、これまでの研究は、いわゆる「人口問題」を徳川幕藩体制解体過程の一問題として取り上げ、それを農民による封建支配への消極的抵抗として認め、その根本原因が封建的土地所有関係それ自体にあることを明らかにしてきた。その限りでは全く正しいが、それ以上の立ち入った究明はなされず、実際の考察が何よりも農民生活の窮乏という事実から出発したため、結局は封建的土地所有の再強化を意図する封建支配者が、封建的秩序の維持、農耕労働力の確保のために農民保護—本百姓の維持・創設、墮胎・間引きなどの「不仁」行為の禁止、赤児養育仕法の実施などの政策を行ったという事実の記述に終始する結果に終わったのである。先生によれば、「人口問題」は、その背後の農民的商品経済の発展、国内市場の形成といった基本的な動向から説明しなければならず、そうすることによってはじめて封建支配者による「人口政策」の封建的危機を克服するための上からの対応の一環としての歴史的意義を正しく評価できるのである。

ところで、この論文は先生の経済思想史研究の分析の枠組みを作るための「一つの基礎作業」でもあったように思われる。というのは、この論文で先生は封建制から資本主義への移行という問題に関心を示され、それを農民的商品経済の発展、国内市場の形成という基本動向から分析するという視点を明確に打ち出しているからである。安藤昌益の思想に関する研究も、この論文を前提としてなりたったものといえる。また、その後の先生の経済思想史研究も、基本的にはここで示された基礎的な視角から、それを深化させる方向で進んでいったように思わ

れる（先生は、後述するように独自の近世経済思想史の体系をつくり上げていくとともに、その過程で『日本経済史論』、御茶の水書房、1967年4月、や『日本経済史』、有斐閣新書、1982年8月、などの優れた近世経済史の著書を刊行されていくのであるが、こうした経済史研究の中にもここで示された分析視角は継承されているように思われる）。それにしても、この著しく実証密度の高い経済史の論文を、経済思想史家としての先生が自らの研究の出発点にあたって執筆されていることは、これから経済思想史の研究を志す若い研究者にとっては、極めて示唆的であるといわなければならない。

先生がこの時期に「封建制から資本主義への移行」論争に大きな関心を寄せられていたことは、同志社大学『経済学論叢』第7巻第4号（1957年3月）に執筆された書評論文「封建制から資本主義への移行——ベスマルトヌイ氏の書評によせて——」によっても十分にうかがうことができる。また、先生は、この時期同時に佐賀藩の藩政改革の研究も手掛けられており、その成果の一部は、1952年3月に平凡社から刊行された『世界歴史辞典』の中の「佐賀藩」「工業の発展——藩専売制、藩営マニュファクチュア、藩専売制の結果——」などの執筆に生かされている。前述の徳川中期以降の「人口問題」および「人口政策」に対する鋭い分析視角の提示は、実はこのような先生の当時における近世経済史研究への関心がしからしめたものであった。

こうして、先生の研究においては、その初発から、経済史研究と経済思想史研究が有機的に結合していたといえる。そして、そうした研究態度は、つづく第2期以降においても、全く変わることなく維持され、むしろさらに強固なものとなるのであった。

3. 第2期——立教大学時代〔I〕（1960年代）

本稿の冒頭においても記したように、逆井先生が同志社大学経済学部から本学経済学部へ転任してこられたのは1958年9月であった。先生は、60年安保闘争の激動期を迎えようとする時に、本学でゼミナールを開講され、「江戸時代の経済思想家の思潮の流れを検討し、江戸時代の朱子学・国学・洋学等の中にみる自主的思想の萌芽を見出す事」（浜本正信「安藤昌益と私」、逆井ゼミナール25周年記念集編纂委員会編『立教大学経済学部逆井ゼミナール25周年記念集』、1984年11月）をゼミナールの研究課題に設定された。具体的には、荻生徂徠、山鹿素行、太宰春台、新井白石、安藤昌益、本居宣長、佐藤信淵、石田梅岩、本多利明、二宮尊徳らの江戸時代の思想家を取り扱われたようであるが、とりわけ当時のゼミナリストインを魅了したのは安藤昌益であった。安保闘争の中で、「忘れられた思想家」安藤昌益の革命思想が学生を引きつけたことは十分にうなづけるが、やはり先生の昌益研究への情熱が学生にも伝わったのではないかと思われる。その後先生のゼミナールでの研究テーマは、「豪農層の思想」、「近畿地方および新潟における寄生地主制の研究」、「自由民権運動」というように変遷していったが、こう

したゼミナール活動は60年安保以後の近代化路線に対する批判という実践的課題と結びついておりと同時に、この間の先生のご研究を反映するものでもあった。先生は、現実が提起する諸問題に対して、学問的に応えようとする真摯な態度を常に保持され、それを教育実践とも結びつけられていくのであった。

本学に移られてから先生が最初に執筆されたのは、「石田梅岩の思想とその背景——石門心学成立の歴史的意義について——(1), (2)」(立教大学『立教経済学研究』第14巻第1, 3号, 1961年6, 12月)であった。この論文は、朱子学的思惟体系の動揺に伴って発生した諸思潮の中で最も低い評価しか与えられていなかった石田梅岩の「石門心学」について、創始者石田梅岩が①どのような社会的歴史的条件のもとで、②どのような課題に対決し、③その課題の解決をどのような思想的手続きで解決し、それに適合的な思想体系を築いていったかという点について詳細な検討を試み、「心学思想の全面的理解とその歴史的 성격の究明」をめざしたものであった。この論文は、後に石川謙『石田梅岩と「都鄙問答」』(岩波新書, 1968年6月)において石門心学研究における「もっとも優れた業績」との高い評価を得ることになったが、先生は井原西鶴や近松門左衛門の作品が封建倫理(儒教)の外側に人間性にもとづく町人倫理を求めたのに対して、その内側に商人道を打ち立てようとしたところに梅岩の教学体系の独自性があると、その歴史的意義の積極面を強調された。しかし、先生はその積極面の中に、いわば「必然的に随伴する盾の裏」としての「限界」が内在していることも指摘することを忘れてはいなかった。次いで執筆された「石門心学の意義と限界——その通俗道德への転落について——」(立教大学『立教経済学研究』第18巻第4号, 1965年2月)は、この石門心学の「限界」(＝通俗道德への転落)を強調したものであった。

先生が石田梅岩の石門心学の限界を敢えて強調しようとしたのは、当時E・O・ライシャワー、中山伊知郎「日本近代化の歴史的評価」(『中央公論』, 1961年9月)などによって提起された日本「近代化」論を補強する形で主張されていた心学の近代化解釈という傾向を批判することを意図したからであった。心学の「近代化」解釈は、竹中靖一『石門心学の経済思想』(ミネルウヅァ書房, 1962年3月)やR・N・ペラー著、堀一郎・池田昭訳『日本近代化と宗教倫理——日本近世宗教論——』(未来社, 1966年3月)などを代表的な業績とするが、先生によれば、心学は封建教学体系から「解放」された「人欲」を基柢とする「商いの道」を、町人の主体的自覚的倫理として道徳的に肯定したと積極的に評価されるのであるが、しかしその肯定はあくまでも封建教学体系の再生強化のために行われたものであり、そのため幕府権力も「庶民教化」の主流思想として心学を採用せざるを得なかったのである。その後の心学の全国的な規模での普及と通俗道德への転落の内部的な要因は、まさに梅岩の思想体系そのものに内在していたのである。

以上の2本の石田梅岩の石門心学に関する論文の間に、先生は「仁齋学の歴史的 성격とその基盤——『古学派』の再検討のために——(1), (2)」(立教大学『立教経済学研究』第16巻

第4号, 第18巻第2号, 1963年2月, 1964年8月), および『寄生地主制』研究に関する一考察——その分析方法の再検討について——」(同前, 第17巻第3号, 1963年11月)を執筆された。前者は, 朱子学的自然法の解体から日本における近代的思惟の成長を説明しようとして仁齋学(古学派)に高い評価を与えた丸山真男氏の研究(丸山真男『日本政治思想史研究』, 東京大学出版会, 1952年12月), 生産力の発展, 近代的自我, 革命的民主主義という近代的社会観の3つの構成要素を個別的に指摘するにとどまっていた安丸良夫氏の研究(安丸良夫「近代社会観の形成」, 『日本史研究』第53号, 1961年3月)などに鋭い方法上の批判を加え, 近代思想の成立は何よりも「民富」の形成を熱望した直接生産者(小経営)の倫理の中に求めなければならないことを主張したものである。このような視点から先生は, 仁齋学(古学派の思想)を, それを成立せしめた社会・経済的諸条件を踏まえて詳細に検討し, 「それらはまさに幕藩制機構に体制的に寄生し, 結合するのみで, なんら新たな社会的展望をもちえなかった町人世界の思想と感情に支えられていた仁齋にふさわしい, しかも彼によってはじめて可能な作業であったといえる」と評価されたのである。

後者の寄生地主制研究についての論文は, 「小商品生産」農業段階の農民層分解が必然的に寄生地主制に帰結するとされた堀江英一氏の研究(堀江英一編『幕末・維新の農業構造』, 岩波書店, 1963年2月)の批判的検討を通じて, 従来の寄制地主制研究の行き詰りを打開するためには, 寄制地主制の基柢である「事実上」の農民的土地所有に「過渡的地代範疇」を適用して「農民層分解論」を再検討し, さらにそこで獲得された理論的成果にもとづいて日本の寄生地主制の独自な性格を明らかにする必要があるとしたものである。この論文は, 直接的には寄生地主制研究の停滞状況に一石を投じたものであるが, 先生のこれまでの研究との関連では, 前述の「封建制から資本主義への移行」を具体的に日本においていかに把握すべきかという問題関心につながっているように思われる。先生は, いわゆる比較経済史学(大塚理論)による封建制から資本制への一面的理解は, その移行の過程の多様性を包含し得ず, 「とくに日本近代化の理解についてはその特質を単なる『段階的ずれ』=後進性, 停滞性に解消してしまい近代史への発展的な内在的展望をふさいでしまった」と批判し, 明治維新を「未完成」のブルジョア革命と把握すべきであるとした。絶対主義権力としての天皇制が温存されたため, それは「未完成」であったが, 維新変革のブルジョア的性格は認めなければならないというのである。こうして, この第2期において先生は, 自らの日本の近代化に対するイメージを明確にしつつ, 近代思想の形成は何よりも直接生産者による「民富」思想の形成に求められるべきであるという視点を明示された。そして, この時期に先生は, さらに近世経済史および近世経済思想史の分野での研究史の整理を試みておられるが, そうした作業を通じて「民富」思想の形成を中心に据えた近世経済思想史の独自の体系を展望されていくのであった。

4. 第3期——立教大学時代〔Ⅱ〕（1970～80年代）

1969年9月に先生は経済学科長（1971年3月まで）、73年4月には経済学部長（1975年3月まで）に就任されたが、この間本学は「大学闘争」の渦中にあり、先生の身边は多忙を極めることになった。先生の学部長在任中の1974年に、立教学院は創立100周年を迎え、経済学部では『立教経済学研究』において「記念論文集」を編むことになった。先生は、その記念論文集に『創立百周年記念論文集』の刊行にあたって（立教大学『立教経済学研究』第28巻第3、4合併号、1974年12月）なる一文を寄せ、「真に大学における個生的、創造的な研究教育活動の創出とその精神的な展開の保証は、まず社会における『市民的自由』の確立を基礎要件とし、ついでそれが本当に『大学』の名に価する研究や教育の自由にできる条件を内部的につくり上げているか否かによるものである」と述べておられる。「大学闘争」の中で、安易に学生に妥協することなく、「学問の府」としての大学を守り通された先生の極めて含蓄のある言葉のように思われる。しかし、この間、しばらくの間先生の執筆活動は途絶えることになった。

学部長の任が解かれ、「大学闘争」も一応の終息をみると、先生は再び活発な研究活動を開始される。先生この時期の研究は、石田梅岩の「石門心学」の研究をさらに深化・発展させるとともに、近世経済思想史の先生独自の体系をまとめられたところに特徴を見出すことができる。

「石門心学」の研究は、もっぱら安丸良夫氏によって提起された「通俗道德論」の再検討という形で進められ、まず「石田梅岩における通俗道德の成立——『通俗道德論』の再検討によせて——」（逆井孝仁、保志 恂、関口尚志、石井寛治編『日本資本主義——展開と論理——』、東京大学出版会、1978年2月）が執筆され、その後あまり時間を置かずに「『通俗道德』の思想構造——『心』の哲学成立の思想的意義——」（立教大学『立教経済学研究』第32巻第3号、1978年12月）および「石門心学における実践倫理の転回——梅岩から堵庵へ——」（立教大学『立教経済学研究』第34巻第3号、1980年12月）を執筆されたのである。この一連の論文において、先生は勤勉、正直、儉約、孝行、和合などの伝統的、日常生活規範＝実践諸徳目の体系から成る「通俗道德」こそが、封建制解体期から近代形成期における小生産者としての民衆の思想形成・主体形成の独自の形態であったとする安丸良夫氏のいわゆる通俗道德論を、近世思想史の中に定着させるという意図をもって梅岩の「心学」を検討され、「梅岩の思想は『職分』＝『家業』実践という形態で自立を実現していく小生産者としての民衆の成立にこたえる実践倫理の提示であった」と結論される。そこには、梅岩の現実の体制を批判しつつも、結果的には体制を容認していくという、主体形成を歴史的に制約されたこの段階の小生産者＝民衆の姿が映し出されている。

こうして石門心学研究を発展させる一方で、先生は近世経済思想史の独自の体系をまとめる

作業に着手され、「経済の発展と経済思想」（大石慎三郎編『日本史』5，近世2，有斐閣新書，1978年9月）および「明治以前の経済思想——近世経済思想史研究の問題点——」（経済学史学会編『日本の経済学——日本人の経済的思惟の軌跡——』，東洋経済新報社，1984年6月）を執筆される。これらの論文については，既に杉原四郎氏による適切な紹介（前掲「逆井孝仁教授の業績について」）があるが，先生は近世経済思想史の体系を，まず前者の論文で〔Ⅰ〕近世経済思想の形成（近世経済思想の基本的特徴）：①幕藩社会の特質と「徳治主義」——林羅山，②前期経世論の展開——熊沢蕃山，山鹿素行，荻生徂徠，〔Ⅱ〕近世経済思想の展開（商品経済の全国的展開と商人思想）：①町人道德の形成——井原西鶴，近松門左衛門，②町人道德の確立——石田梅岩，③商人の社会認識——懐徳堂学派，④経世論＝経済論の形成——太宰春台，〔Ⅲ〕近世経済思想の変容（後期経世論＝重商主義思想の形成）：①藩重商主義——海保青陵，②国家的重商主義の形成——本多利明，③国家的重商主義の展開——佐藤信淵，〔Ⅳ〕近世経済思想の帰結：①生産力思想の展開——安藤昌益，②「民富」思想への前進——二宮尊徳，大蔵永常，③「民富」思想への展望——三浦命助という構成で体系化された。その内容を要約すれば，ほぼ次のようである。

石高制＝米納年貢制に立脚する幕藩体制は，農民に対して自然経済を強要しながらも，その一方では領主階級の年貢米の換金化と生活必需物資獲得の必要から，三都（京都，大阪，江戸）を中心とする全国的規模での商品経済の展開を前提として成り立つ独特な封建社会であった。従って，先生によれば林羅山にみられる領主側の体制認識としての「徳治主義」が，自然経済を基礎とした支配秩序維持の論理であったため，その非現実性を露呈して破綻していくのは，いわば必然的であった。その後，熊沢蕃山，山鹿素行，荻生徂徠らによる前期経世論が成立するが，これも土地＝富という視点から自然経済的支配体系の中に，それとは異質な商品経済をなんとか包摂しようとする幕藩体制維持のための「再生産論」であった。18世紀になって，商品経済の発展が農村地域をまきこみながらさらに一層進展すると，商人の経済認識が「流通合理主義」という形をとって前進するようになる。それは，まず井原西鶴や近松門左衛門の文芸作品にみられるように町人道德の形成にまで進み，石田梅岩によって思想的に基礎づけられる。とくに，梅岩においては，「日常的職分実践つまり労働において人間形成を捉えようとするすぐれた視点」が伏在しており，その延長線上に「商品経済の展開に媒介されつつ自己の労働によって着実に自立をめざしていた小生産者層の前進」を展望できるが，商品経済の発展がもたらす矛盾の契機をもっぱら「私欲」という人間的・道徳的契機にもとめていたため，その矛盾の解決も結局は人びとの「心がけ」の問題に還元されてしまったのである。こうした道徳と経済の分裂ないし相克は，「流通合理主義」を基調とするこの時代の商人の経済思想を特徴づけるものであって，それは富永仲基や山片蟠桃に代表される大坂の「懐徳堂」学派にも共通するものであった。

18世紀の後半になって，商品経済の農村への浸透が全面的に進行すると，先進地域における

農民的商品生産の展開と農民層分解の進行、そして後進地域においては自給農家の疲弊が深刻となり、本百姓体制はくずれていく。そして、それに伴って領主財政は窮乏化し、北辺にはじまる対外問題ともからんで幕藩体制の危機が深まっていく。こうした中で、幕藩体制の建て直しをはかるために提唱されたのが後期経世論＝重商主義であり、それは海保青陵にみられる藩重商主義と本多利明や佐藤信淵によって主張された国家的重商主義の2段階に区分されるが、いずれもその国民経済把握において国内市場論を欠いており、幕末以降の「富国強兵」路線を準備するにとどまった。

しかし、農民・小生産者の立場からの経済思想も着実に前進しており、たとえば安藤昌益は生産者の人間解放を通じて生産力を向上させる方向を模索していた。また、二宮尊徳は農民経営における剰余の蓄積を追求し、異色の農学者大蔵永常は、農業生産力の発展を技術改良および商品生産化の促進によってはかろうとして労働生産性概念を獲得し、「民富」形成への展望を模索しつつあった。しかし、尊徳は労働を土地に還元したため農本主義の立場から脱却し得ずに精農主義的生産力論に陥り、永常は労働を貨幣に還元したため「流通合理主義」的経済認識の壁を破ることができなかった。そうした中で、南部藩の百姓一揆の指導者であった三浦命助が、農民自身による商品生産および流通こそが、人間的自由と富裕をもたらすとし、人間の労働こそが富の源泉であるという立場から「民富」思想を獲得していたことが注目される。

そして、後者の論文では、近世中期に成立した「経験合理主義」を近代合理主義との連続性において捉え、それに高い評価を与える最近の学界の動向に対して、先に述べたような「経済思想史の体系的認識は、あくまでその思想＝理論形成を人びとの生産＝労働実践をふまえた歴史的主体性形成とかかわらせて捉える限りにおいて、はじめて可能である」という立場から、「経験合理主義」の本質が実は「流通合理主義」にはほかならないことを明らかにする。そのため、その構成は〔Ⅰ〕領主的「経世論」＝経済論の限界、〔Ⅱ〕「流通合理主義」の展開——懷徳堂学派と石田梅岩、〔Ⅲ〕「合理主義」的経済論の前進——三浦梅園、〔Ⅳ〕「合理主義」的経済論の限度——海保青陵、〔Ⅴ〕生産力の思想という構成をとっており、先生の近世経済思想史の体系認識の意義がより明確になっている。

それでは、このような先生の近世経済思想史の体系把握の特徴はどのような点に求められるのであろうか。先生は、内田義彦氏の「日本経済学はつねに輸入の学問であった。輸入のというのは、一つには外国から入ったという意味であるが、さらに、その奥には、個々人の思想にとって、つねに外的なものにすぎず、骨肉まで沈下定着するというものではなかったという意味をふくめてである」(内田義彦『日本資本主義の思想像』、岩波書店、1967年10月)という指摘が示唆的であるとして、これを「わが国における経済学を受容・定着が、何ととっても日本近代化過程にみられた広範な人びとの歴史的・伝統的な思想形成＝主体形成の試みとの断絶において基本的に行なわれた」ということを主張しているものとして解釈する。先生の近世経済思想史研究は、まさにここから出発しているように思われる。先生によれば、近代日本の経済

学は「先進国からの輸入学問」であり、「近代化を目指す国家の政策学」であった。そして、それは「民衆の生活向上の願いと人間的権利のめざめを抑圧する『政商財閥型』といわれた資本主義の発展を、現実におしすすめた理論」であった。従って、ここには「みずからの富裕と人間解放実現の条件を見出す余地」はほとんどなく、経済学は「人間形成にとってもっとも縁遠い学問」となり、「経済の世界の外部」に人びとは自我の確立や人格の陶冶、すなわち主体形成の契機を求めざるを得なかったのである。

先生の近世経済思想史研究は、こうした「民富」の視点を欠いた近代日本の経済学のあり方は、結局は近世の経済思想の理論的成熟度に規定されているとして、それが「近代化を指向する経済理論をついに内発的に準備しえなかったという歴史的現実」の意義と限界を明らかにするものであったのである。先生の執拗なまでの「流通合理主義」批判、そして「民富論」の形成の追求は、実はそのためであった。こうした立場は、初期の安藤昌益研究以来一貫しているものであったが、石田梅岩、あるいは「古学派」=伊藤仁斎の個別研究を通じて、いまその内容を一層豊富にして、近世経済思想史の体系的把握に立ち至ったのである。

ところで、杉原四郎氏は「自由主義経済学受容期研究の問題」（前掲『日本の経済思想家たち』所収）なる論稿において、経済思想における近世と近代の連続・非連続を問題にされ、河野健二「経済学の日本的土壌——徳川期の経済思想・試論」（前掲『日本の経済学』所収）と対比させながら、先生の立場を「断絶説」であるととした。既に明らかなように先生は「経済大国」となった日本の現状から逆照射して、その源流を江戸時代に求めるような安易な現状肯定の立場にはたっていない（この点については、杉原四郎・逆井孝仁・藤原昭夫・藤井隆至編『日本の経済思想四百年』、日本経済評論社、1990年6月、に先生が執筆された「近世編概観」を参照のこと）。その意味では、先生は確かに「断絶説」である。しかし、先生はその厳しい日本近代化=天皇制批判を展開するために、「国富」のための経済思想と真に対決し得る「民富」のための経済思想を求め続け、ついにその全面開花をみないという近世日本経済思想の展開の現実を指摘し、結局日本においては「民富」論を包摂した経済思想を内発的に形成し得なかったことを強調されたのであった。そうした視点は、「政商財閥型」資本主義と称される日本の「近代化」に対する有効な批判ともなるものであった。従って、先生の経済思想史研究を「断絶」か「連続」かという形で評価をしてみてもあまり有効とは思われない。問題は、むしろ何が断絶しており、何が連続しているかを見極めることであり、それは結局は日本の「近代化」をどうみるかということにかかわってくるように思われるからである。先生の最も新しい論文は、「河上肇における日本経済思想史研究」（立教大学『立教経済学研究』第44巻第4号、1991年3月）であるが、先生はそこで河上肇の徳川期経済思想史の研究を検討され、「ともあれ河上の日本経済思想史研究の正当な評価は、彼の学問的いとなみ全体との関連を意識しないではおこなえない。それはまさに彼の日本近代に対する現実分析の不可欠の一環なのであった。この意味でそれは彼による『自己認識作業』そのものに外ならなかったのである」と述

べておられる。この言葉は、おそらく先生の近世経済思想史研究そのものにもあてはまるものであろう。

5. お わ り に

以上、安藤昌益の研究に始まり、石田梅岩の研究を深めながら、ついに近世経済思想史の独自の体系を樹立された先生の研究の足跡を概観してきた。もちろん、これで先生の学問を全て紹介し得たわけではないし、多分に私の誤解もあるのではないかと危惧している。

それにしても、先生の研究は、鋭い問題意識と明確な方法論に裏づけられていた。先生は、戦前期の日本資本主義論争が提起された学問的課題を、絶えず生起する現実の諸問題あるいは学界の動向などを常に意識して追求されてきた。それは、敢えて一言でいえば日本「近代化」批判ということになるかと思われるが、先生は大塚久雄、松田智雄、高橋幸八郎らの諸氏によって開拓された比較経済史学、あるいは内田義彦氏や本学名誉教授の小林昇、住谷一彦両氏らの経済学説史および経済思想史の研究を批判的に摂取しながら、自らの独自の日本経済思想史研究の方法を樹立してきたように思われる。周知のように、比較経済史学の伝統は本学経済学部にも受け継がれており、こうしてみると、先生の近世経済思想史の体系認識は、本学経済学部を豊かな土壌としてはぐくまれてきたものともいえる。

先生は、ゼミナール25周年を記念して行われたOBの方々との座談会で、現実には安易に妥協せず、「少くともものを自分で考える人間、自分自身で決断する人間、自分自身で理想をもち、その理想に対して努力していくという人間になってくれ」と言い続けることが、「教師としての最少限の任務」であると語っておられる（前掲『逆井ゼミナール25周年記念集』）。ここに、教育者としての先生の真骨頂がみられる。こうした教育者としての先生の姿勢は、研究対象としての安藤昌益や石田梅岩への接し方とある種の共通性があるように思われる。先生は極めて整序された経済理論を武器に、安藤昌益や石田梅岩の思想の限界を指摘してきた。しかし、それは昌益や梅岩を一刀両断のもとに切り捨てるというものでは決してなかった。自らの思いを彼らに投影しながら、彼らの思想を丹念に、しかも深い愛情をもって検討していき、しかし結局はその限界を指摘せざるを得ないという、それはおそらく先生にとって苦渋に満ちた作業ではなかったかと思われる。生産を担う民衆に歴史形成の主体としての期待をかけるという先生の姿勢は、研究の場においても、教育の場においても不変であったのである。

学問に対しては極めて厳しい態度でのぞまれるが、一方で先生は大変に気さくな方で、1961年11月号の『経済セミナー』誌の表現を借りるならば、『「孝仁」の名にそむき庶民性豊」かなお人柄である。それは私が先生のご指導を仰ぐようになってからも全く変わっていない。人情に厚く、とくに若い研究者に対しては、大変にきめの細かいご配慮をして下さる。従って、先生のもとには学内外の若手研究者が集まってこれ、先生が代表を務められる日本経済思想史

研究会が活発な活動をしておられるのも、先生のこのようなお人柄によるところが大である。

今年の5月4日に日本経済思想史研究会は、関西在住の研究者の方々との交流を目的として、京都の立命館大学で研究会を行なった。連休中にもかかわらず、会場となった立命館大学の末川記念館には50名ほどの研究者が集まり、長時間にわたって活発な討論が繰り広げられた。研究会を終えて、翌日の5日に私たち（私のほかに、中京大学の川口浩、福岡女子学院大学の八木清治、立教から愛媛大学に赴任したばかりの松野尾裕、私立岩倉高等学校の仁木良和、それに日本経済評論社の谷口京延らの諸氏がおられた）は、先生に同行して、法然院（河上肇）から黒谷光明寺（海保青陵）、そして知恩院（前田正名）を巡る「日本経済思想史の旅」をしぼし楽しんだ。私たちは宿泊先の末川記念館から市バスに乗り、先生のお巣である同志社大学の前で降り、そこからタクシーで京都北山にひっそりとたたずむ法然院に向かい河上肇の墓参をすませた。しかし、そこからは徒歩で黒谷光明寺、知恩院を巡ることになった。この時先生は普段にもまして雄弁で、同志社時代の思い出を含めて京都の町のことを細かに解説してくださった。2時間ぐらいは歩いたと思われるが先生はすこぶるお元気で、平安神宮の近くの茶店で湯豆腐を食べながら、日本の経済思想史研究の問題点と今後の課題について熱っぽく話をされていたお姿が大変印象深かった。定年をお迎えになられたとはいえ、先生の学問に対する情熱はいささかも衰えず、研究者としてはなお現役である。どうか、これからもご健康に留意され、ますますお元気でご活躍されるとともに、私たちにも大きな刺激を与え続けていただきたい。

先生の学問を語るには余りにも拙ない一文を寄せることになってしまったが、先生のご海容をただただ願うのみである。

(1991年9月)